

Prajñāpradīpa-ṭīkā 第 XXIV 章
テキストと和訳 (4)
– uttarapakṣa 3 –

西山亮・早島慧

はじめに

本稿は、8 世紀前半インドのテキスト *Prajñāpradīpa-ṭīkā* 第 XXIV 章のチベット訳校訂テキストとその和訳の続編であり、同章の第 18・19 偈の注釈箇所に対応する。 *Mūlamadhyamaka-kārikā* 第 XXIV 章第 18 偈については、仏教思想史において最も有名な詩節の一つであり、東アジアにも影響を及ぼしたことで知られている。「縁起」「空性」「施設」そして「中道」を内容とするその偈に対して、これまで数多くの研究者が翻訳を提示し、解説を施してきた。しかしその偈の簡潔さ故に解釈が多岐にわたり、今日に至るまで、偈の意味の探求は続いている。

Mūlamadhyamaka-kārikā 第 XXIV 章第 18 偈を理解する上で、Bhāviveka および Avalokī-tavrata の注釈が言及されることは、極めて稀である。Candrakīrti の注釈の参照される頻度と比較すると、無視されていると言っても過言ではない。この箇所に限らず、サンスクリットテキストが見出されていない *Prajñāpradīpa* の一次資料としての価値が低くなるのは仕方なく、参照の順位が下がるのは止むを得ない。しかし、その注釈は無視して良いものではなく、現に当該の第 18 偈に関しては、看過できない点がある。

それはまず、Candrakīrti のその注釈に二諦に関する用語が用いられていないのに対して、Bhāviveka は二諦説を用いてその偈を整理している点である。第 18 偈 a 句の縁起に関する注釈箇所（本稿 2.12.2.1）において Bhāviveka は、

dños po...don dam par rkyen rnams las rten ciñ 'brel par ño bo ñid kyi 'byuñ ba med de /
mig la sogs pa'i skye ba ni tha sñad kyi bden pa la brten pa yin no //

存在は（中略）勝義として諸縁に依って自性として生じることはない。眼などの生起は、言語活動の諦（世俗諦）に依っている。

というように、勝義としてはあくまで「不生」であるが、一方の言語活動すなわち世俗としては、日常的な経験世界で用いる意味での「生起」を、そのまま「生起」として認める。二諦説を用いて論点をうまく整理していると言えよう。

第 18 偈の注釈に二諦説を用いる傾向は、Avalokitavratā において、より顕著に見られる。たとえば、第 18 偈 b 句の注釈箇所（本稿 2.12.2.2）の中で、Bhāviveka の「自性を離れている（*ño bo ñid dañ bral ba*）」ということばに対して、「二諦のいずれの仕方でも自性を離れている（*bden pa gñi ga'i tshul du yañ ño bo ñid dañ bral ba*）」というように Avalokitavratā はことばを補っている。またその箇所に先立って Avalokitavratā は次のように述べている（本稿 2.12.2.1.1）：

rten ciñ 'brel par 'byuñ ba gañ yin pa de ni kun rdzob tu rgyu dañ rkyen rnams la brten nas /
sgyu ma'i mtshan ñid tsaṃ du 'byuñ bas ño bo ñid med pa'i phyir rgyu dañ rkyen rnams la
'byuñ ba yañ med pa de ni skrag pa'i gnas ma yin te /
縁起したものは、世俗として諸因縁に依って、幻を特徴とするに過ぎないものとして生
じるので、無自性であるから、諸因縁に〔依って、幻を特徴とするに過ぎないものとして〕
生じることすらないものは、恐怖の根拠ではない。

この言明をはじめ、Avalokitavratā の思想の背景については、今後の研究に俟つ。

この度校訂・訳出したテキストのロケーションは次の通りである。

Parts of *Prajñāpradīpa-ṭīkā* corresponding to this text and translation

- *Co ne*: za 243b5 – 246a7.
- *sDe dge*: Tohoku no. 3859, za 240a7 – 243a2.
- *dGa' ldan*: no. 3258, za 360b4 – 364a6.
- *sNar thang*: za 282a2 – 285a6.
- *Peking*: Otani no. 5259, za 286b7 – 289b7.

(each abbreviation is PPrT-C, PPrT-D, PPrT-G, PPrT-N, PPrT-P in this paper.)

Parts of *Prajñāpradīpa* corresponding to this text and translation

- *Co ne*: tsha 231a6 – 232b1.
- *sDe dge*: Tohoku no. 3853, tsha 230a7 – 231b1.
- *dGa' ldan*: no. 3252, tsha 327b3 – 329a4.
- *sNar thang*: tsha 263b3 – 264b7.
- *Peking*: Otani no. 5253, tsha 289a3 – 290a8.

(each abbreviation is PPr-C, PPr-D, PPr-G, PPr-N, PPr-P in this paper.)

part 1

Translation

2.12 縁起・空性・施設・中道 [k. 18]

2.12.1 空性への恐れ (D240a7–b2, P286b7–287a2)

2.12.2 縁起と空性 [k. 18ab]

2.12.2.1 縁起 [k. 18a]

2.12.2.1.1 不生 (D240b2–6, P287a2–7)

2.12.2.1.2 生 (D240b6–7, P287a7–8)

2.12.2.2 空性 [k. 18b] (D240b7–241a1, P287a8–b2)

2.12.2.3 教証 (D241a1–3, P287b2–4)

2.12.3 施設と中道 [k. 18cd] (D241a3–4, P287b4–5)

2.12.3.1 施設 [k. 18c] (D241a4–5, P287b5–6)

2.12.3.1.1 世俗としての無自性 (Avalokitavrata の観点から, D241a5–b3, P287b6–288a5)

2.12.3.1.2 勝義としての無自性 (Avalokitavrata の観点から, D241b3, P288a5–6)

2.12.3.2 中道 [k. 18d] (D241b3–D242a2, P288a6–b5)

2.12.4 傍論

2.12.4.1 対論者の k. 18 解釈 (D242a2–5, P288b5–8)

2.12.4.2 対論者への批判 (D242a5–b1, P288b8–289a5)

2.13 空性と縁起は不可分 [k. 19] (D242b1–3, P289a5–7)

2.13.1 反論 (虚空の場合, D242b3–6, P289a7–b3)

2.13.2 答論 (D242b6–7, P289b3–5)

2.14 前主張 (Pūrvapakṣa) 批判の結論 (D242b7–243a2, P289b5–7)

凡例: (_) = 指示代名詞の内容や原語, [_] = 文意を明瞭にするための原文にはない補い, [_] = 原文にはない位置づけ, * = 梵文の想定形; Underline = *Mūlamadhyamaka-kārikā*, **Bold** = *Prajñāpradīpa*.

2.12 縁起・空性・施設・中道 [k. 18]

2.12.1 空性への恐れ (D240a7–b2, P286b7–287a2)

さて対論者たち¹は、空性という対象²を構想分別して、その空性を恐れて「それは成り立たない」³というように欠陥を結びつけ、異議を唱えている。その空性は分別されたものであるから、「汝はまず最初に空性という対象を構想分別してしまったがゆえに〔その空性を恐れる〕。子供が恐ろしいヤクシャの姿を描いてしまったがゆえに恐怖にかられ、『恐ろしい』ということばをもらすように」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。

「その空性という対象である縁起は自性がなく空で、幻のようなものである」と言うので、「それに恐れをなすべきではない」と示すために「もし、その〔空性〕という対象⁴であるものに実体がなく空であり、幻を自性とするようなものであるならば、恐れを拭い去るべきである」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。

2.12.2 縁起と空性 [k. 18ab]

2.12.2.1 縁起 [k. 18a]

2.12.2.1.1 不生 (D240b2–6, P287a2–7)

「その〔空性〕にどうして恐れをなすべきではないのか」と言うならば、縁起が自性空であるので、その〔空性〕は恐怖の根拠ではない。〔そのこと〕を示すために、「つまり、『縁起を空性と説く (k. 18ab)』。眼と芽などの存在は、因と種などの諸縁において、有・無として、別異・非別異として、そしてその両者として存在するのではない⁵ 独自の存在⁶である。〔そのような存在が〕勝義として諸縁に依って自性として生じることはない」と語ったのである。縁起したものは、世俗として諸因縁に依って、幻を特徴とするに過ぎないものとして生じるので、無自性であるから、諸因縁に〔依って、幻を特徴とするに過ぎないものとして〕生じることすらないものは、恐怖の根拠ではない。次のように「世間の人々は、根拠のないものに恐怖を抱き、焼き悩まされる。〔かれらは〕無種姓であり、悪友〔をもち〕、善を以前に積んでおらず、知を磨いておらず、長い間、非福の大きな集積を増大させてしまい、この法を恐れ、この大いなる利益から漏れ落ちてしまう」⁷と説き示されているように。

2.12.2.1.2 生 (D240b6–7, P287a7–8)

「眼などの生起は、言語活動の諦 (*vyavahārasatya, =世俗諦) に依っている」とは、世俗として、幻を特徴とするに過ぎないものとして生起するあり方を示している。その〔眼などの生起〕もまた、恐怖の根拠ではない。

2.12.2.2 空性 [k. 18b] (D240b7–241a1, P287a8–b2)

「『それを空性と説く』のは、自性を離れているからである」ということは〔次のことを意味

している]、「縁起を空性と説く (k. 18ab)」ということをもって、二諦という仕方で設定されている縁起、それを空性と説く〔と理解すべきである〕。「縁起を空性と説くのは、他の縁に依って生じることによって、二諦のいずれの仕方でも自性を離れているから、〔つまり〕自性は空性〔だからである〕、という意味である。

2.12.2.3 教証 (D241a1–3, P287b2–4)

まさに以上のことの典拠を示すために、「聖『アナヴァタプタ龍王所問經』⁸に、次のように『何であれ縁より生じるものは不生である。それには自性としての生起はない。何であれ縁に依るものは空であると説かれている。空性を知る者、彼は不放逸である』と仰り、また同様に、聖『楞伽經』⁹に『マハーマティ、自性として不生であること意図して、すべての法は空であると説いたのである』と仰ったように」と〔師 Bhāviveka〕は語ったのである。

2.12.3 施設と中道 [k. 18cd] (D241a3–4, P287b4–5)

「縁起を空性と説く (k. 18ab)」と〔表現される〕まさにそれ（空性）は、世俗として、諸の素材を素にして施設されるべきであり、また、まさにそれ（空性）は、二諦いずれ〔として〕も、無自性だから中道であることを示すために、「それは〔素材を〕素にして施設されるものであり、それが中道である (k. 18cd)」¹⁰と〔師 Bhāviveka〕は語ったのである。

2.12.3.1 施設 [k. 18c] (D241a4–5, P287b5–6)

「〔素材を〕素にして施設される」というあり方を示すために、「『縁起』と表現される空性は、〔素材を〕素にして施設される」と〔師 Bhāviveka〕は語ったのである。

2.12.3.1.1 世俗としての無自性 (Avalokītvratā の観点から, D241a5–b3, P287b6–288a5)

その〔素材を〕素にして施設されたものもまた、世俗として、世間と出世間の言語活動の仮構 (*vyavahāraprajñāpti) によって、それぞれ、自身の素材 (*upādāna) を素にした上で、施設されたものとして無自性であることを示すために、「世間と出世間の言語活動の仮構¹¹によって、諸々の素材を素にして施設されたものである」と〔師 Bhāviveka〕は語ったのであり、あるものを素材として施設されるべきものである、眼、芽、瓶、着物、凡夫、声聞、独覚、菩薩、如来などは、それぞれの素材である因と縁〔を素材として施設される〕。つまり眼はアルプダなどを素材として施設され、芽は種など、瓶は粘土など、着物は糸など、凡夫は業と煩惱など、声聞と独覚は資糧道と煩惱障の断など、菩薩と如来は地と波羅蜜と力と無畏と不共〔仏法〕などを素材として施設される。したがって、世間の眼、芽、瓶、着物、凡夫なども、自性が無いので空性であると説き、出世間の声聞と独覚と菩薩と如来をはじめとする諦をご覧になる方々¹²も、自性が無いので空性であると説く。

2.12.3.1.2 勝義としての無自性 (Avalokitavrata の観点から, D241b3, P288a5-6)

勝義としては、それら〔眼などの存在は〕¹³は諸縁からでさえ、どのようなあり方でも生じないから、自性が無いので空性と説く。

2.12.3.2 中道 [k. 18d] (D241b3-D242a2, P288a6-b5)

「それこそが中道である」というあり方を示すために、「『それこそが中道である』、『中』は生・不生、有・無という両極端を捨て去るからである。つまり、生でも不生でもなく、有でも無でもなく、常でも不常でもなく、空でも不空でもないの、したがって、『般若波羅蜜』に次のように、『中道を修習する者は、『眼などの存在は有である』というように構想分別せず、『眼などの存在は無である』というように構想分別しない』¹⁴云々と仰っており、また、聖『宝積経』に、『カーシャバ、『有』というこれは一つ目の極端であり、『無』というこれが二つ目の極端である。その両極端の間にある中、それは色を持つものではなく、言い表せず、無碍で、留まらず、顕現ではなく、識ではなく、無住である』¹⁵と仰ったそれらのことは、成就したものである。道は、獲得の方便である知の意味である¹⁶と〔師 Bhāviveka は〕語ったのであり、〔素材を〕素にして施設され、「縁起」と表現される空性が、中道である。言語活動としても、「あるものがあるものに依って生じるとき、まず両者は同一でもないし、また別異でもない。したがって、〔諸法は〕断絶することも、常住であることもない (MMK XVIII.10)」というあり方で中道であり、勝義としても、「他より知られず、寂静であり、諸々の戲論によって戲論されず、分別を離れており、多義ではない、これが真実の特徴である (MMK XVIII.9)」というあり方で中道である。

2.12.4 傍論

2.12.4.1 対論者の k. 18 解釈 (D242a2-5, P288b5-8)

¹⁷「さて、次のように〔反論があるとしよう〕：私 (=反論者) もまた言う：各々特定の因と縁とによる『縁起を空性と説く。それは〔素材を〕素にして施設されるものであり、それが中道である (k. 18)』と。〔つまり〕存在は、本質をもって以前生じていないものから生じる。その〔本質が〕存在の自性であるが、その〔自性〕は兎角のように有るのでもなく無いのでもない。自ら本質をもって生じるものは両極端を捨てるから中道である。〔そのように対論者が〕考えるならば」と〔師 Bhāviveka が言ったこと〕は、対論者たちが、師のお造りになったこの偈の意味を「存在は無自性ではないが、〔存在は〕以前に生じていないものから生じ、〔有・無などの〕両極端として語るべきではないから、空性でもある。〔一方で存在は〕自ら本質をもって生じるものでもあるから、有自性である。それが中道である」と考えることを意図して〔述べたことである〕。

2.12.4.2 対論者への批判 (D242a5-b1, P288b8-289a5)

それを否定するために、ここで注釈者自身 (Bhāviveka) が、「そこで、以上〔対論者の言

う) ようには、空性は不成である。この偈は分別の垢を洗い流すものであるにもかかわらず、もし、汝が分別の垢の沼にまみれているがゆえに束縛されているならば、束縛に従っている(ことになる)。それと同様に、冠のマニを足飾りとして身につけたとしても害は無いけれども、しかしながら、『身につけたその〔マニ〕は、不適切なところについている』と賢者たちによって恥をかかされるように、その〔譬喩の〕ように、汝がそのように語ったことによっても、この偈には害は無いけれども、汝の主張内容は不成である。(なぜならば)縁起は有自性と不可分なものとして不成だからである¹⁸⁾と語ったのである。縁起が、有自性と接続することは不成であるから「師〔Nāgārjuna〕御前のお造りになったこの偈の意味を、誤って導いてはならない」ということが示されているのである。

2.13 空性と縁起は不可分 [k. 19] (D242b1–3, P289a5–7)

「まさにそれ(縁起が有自性と不可分なものとして不成であること)を示すために説く:『(何らかのものに)依らずに生起する法は決して存在しない。したがって、空でない法もまた決して存在しない (k. 19)』と、(これは)『縁起は幻化人のように無自性だからである』ということを用意している」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。【主張】内と外〔のすべての法〕、世間と出世界のすべての法は、無自性である。【証因】縁起したものであるから。【喩例】たとえば、幻化人のように、ということを用意している。

2.13.1 反論(虚空の場合, D242b3–6, P289a7–b3)

「もし『縁起しない虚空などに、依って起こることはないから、証因が同品の一部に不成であるという欠陥がある¹⁹⁾』と言うならば」について言えば、対論者たち²⁰⁾が述べたことばである。〔つまり、〕「中観派が、『(何らかのものに)依らずに生起する法は決して存在しない。したがって、空でない法もまた決して存在しない (k. 19)』ということによって、『縁起は幻化人のように無自性であるから』と説いた証因は、『縁起』というそれによって遍充されない。〔つまり〕この〔偈〕で、縁起しない虚空などに、依って起こることはないから、汝の証因である『縁起している』というそれは、色などの同品〔の中の〕虚空などの一部に不成であるという欠陥があるので、不合理である」と〔対論者たちは述べたのである〕。

2.13.2 答論 (D242b6–7, P289b3–5)

その応答としてここで、注釈者自身 (Bhāviveka) が、「それにはすでに回答を与えている²¹⁾ので、(ここで)反論する必要はない」と語ったのである。同品に遍充されないけれども、証因としてふさわしい。たとえば「【主張】声は無常である。【証因】努力の直後にあるもの(*prayatnānantarīyaka)だからである」というそれ(証因)は、稲妻と森の花を遍充しないけれども、「声は無常である」という〔主張〕の証因として相応しいから、欠陥はない。〔このように〕すでに回答を与えているので、(ここで)反論する必要はないのである。

2.14 前主張 (Pūrvapakṣa) 批判の結論 (D242b7–243a2, P289b5–7)

「したがって、『【主張】勝義として諸存在は有自性に他ならない。【証因】生じ滅する属性を持っているからである』と述べた²² 中のその証因には、肯定的随伴 (*anvaya) もないし、異品のみを確認されるから無内容 (*vyartha) でもある」とは、結論 (*upasaṃhāra) と論証の結果である。対論者が述べたその証因には、勝義として喩例が存在しないので不成に他ならない。〔生・滅は〕世俗のみに〔つまり〕勝義にとっての異品のみに見られるから無内容に他ならないものでもあるので、諸存在は有自性として不成である。

part 2

Text

2.12 Dependent Arising, Emptiness, Dependent Designation, and the Middle Way [k. 18]

2.12.1 The Fear of Emptiness (D240a7–b2, P286b7–287a2)

2.12.2 Dependent Arising and Emptiness [k. 18ab]

2.12.2.1 Dependent Arising [k. 18a]

2.12.2.1.1 Non-Arising (D240b2–6, P287a2–7)

2.12.2.1.2 Arising (D240b6–7, P287a7–8)

2.12.2.2 Emptiness [k. 18b] (D240b7–241a1, P287a8–b2)

2.12.2.3 Textual evidence (D241a1–3, P287b2–4)

2.12.3 Dependent Designation and the Middle Way [k. 18cd] (D241a3–4, P287b4–5)

2.12.3.1 Dependent Designation [k. 18c] (D241a4–5, P287b5–6)

2.12.3.1.1 Conventionally there is no intrinsic nature (from Avalokitavrata's point of view, D241a5–b3, P287b6–288a5)

2.12.3.1.2 Ultimately there is no intrinsic nature (from Avalokitavrata's point of view, D241b3, P288a5–6)

2.12.3.2 The Middle Way [k. 18d] (D241b3–D242a2, P288a6–b5)

2.12.4 Digression

2.12.4.1 Opponent's interpretation of k. 18 (D242a2–5, P288b5–8)

2.12.4.2 Response to opponent (D242a5–b1, P288b8–289a5)

2.13 Emptiness and Dependent Arising are inseparable [k. 19] (D242b1–3, P289a5–7)

2.13.1 Objection (concerning the concept of *ākāśa*, D242b3–6, P289a7–b3)

2.13.2 Response (D242b6–7, P289b3–5)

2.14 Conclusion of criticism of *Pūrvapakṣa* (D242b7–243a2, P289b5–7)Underline = *Mūlamadhyamaka-kārikā*, **Bold** = *Prajñāpradīpa*; ins. = insert(s), om. = omit(s).

2.12 Dependent Arising, Emptiness, Dependent Designation, and the Middle Way [k. 18]

2.12.1 The Fear of Emptiness (D240a7–b2, P286b7–287a2)

da ni pha rol po dag stoñ pa ñid kyī don yoñs su brtags nas / stoñ pa ñid des skragⁱ ste / de mi ruñ ño źes skyon 'dogsⁱⁱ śiñ spoñ bar byed pa'i stoñ pa ñid de gañⁱⁱⁱ yin pa de brtag pa'i phyir / **khyod^{iv} re źig stoñ pa ñid kyī don yoñs su brtags nas / byis pa gnod sbyin gyi zgugs 'jigs su ruñ ba mñon par bris nas skrag ste / 'jigs pa'i sgra 'byin par byed pa lta bu de gañ yin^v źes** bya ba smras so //

stoñ pa ñid de'i don^{vi} rten ciñ 'brel bar 'byuñ ba ño bo ñid med ciñ stoñ pa sgyu ma lta bu la bya grañ^{vii} na / de lta na / de la skrag par mi bya'o^{viii} źes bstan pa'i phyir / **gal te de'i don zgugs dños po med ciñ stoñ pa sgyu ma'i ño bo ñid lta bu yin na ni skrag^{ix} pa thoñ śig^x** ces bya ba smras so //

2.12.2 Dependent Arising and Emptiness [k. 18ab]

2.12.2.1 Dependent Arising [k. 18a]

2.12.2.1.1 Non-Arising (D240b2–6, P287a2–7)

de la ji ltar skrag par mi bya źe na / rten ciñ 'brel par 'byuñ ba gañ yin pa de ni ño bo ñid stoñ pa yin pas / de skrag pa'i gnas ma yin par bstan pa'i phyir / **'di ltar^{xi}**

rten ciñ 'brel 'byuñ gañ yin pa //

de ni^{xii} stoñ pa ñid du bśad // k. 18ab [1st time]^{xiii}

mig dañ myu gu la sogs pa^{xiv} **dños po** rgyu dañ sa bon la sogs pa^{xv} **rkyen rñams la^{xvi} rañ gi dños po yod pa dañ^{xvii} med pa dañ /^{xviii} gźan dañ^{xix} gźan ma yin pa dañ / gñis kar yod pa ma yin pa ni^{xx} don dam par rkyen rñams las^{xxi} rten ciñ 'brel par^{xxii} ño bo ñid kyis 'byuñ ba med^{xxiii} ces^{xxiv} bya ba smras te / rten ciñ 'brel par 'byuñ ba gañ yin pa de ni kun rdzob tu rgyu dañ rkyen rñams la brten nas / sgyu ma'i mtshan ñid tsam du 'byuñ bas ño bo ñid med pa'i phyir rgyu dañ rkyen rñams la 'byuñ ba yañ med pa^{xxv} de ni skrag pa'i gnas ma yin te / ji skad du^{xxvi}**

'gro ba gnas ma yin la skrag pa gduñ byed pa //^{xxvii}

ⁱ PPrT-P sgrag ⁱⁱ PPrT-P skyon pa dogs ⁱⁱⁱ PPrT-DCPN, PPr gañ: PPrT-G gañ gañ ^{iv} PPr-C khyed ^v PPr ins. / ^{vi} PPrT-PNG om. don ^{vii} PPrT-G grañs ^{viii} PPrT-DCN ins. // ^{ix} PPr-CPG sgrag ^x PPrT-DC thoñ śig: PPrT-P thoñ źig: PPrT-NG thoñ źig: PPr thoñ śig / ^{xi} PPrT-C om. / ^{xii} PPrT, PPr-DN ñid ^{xiii} MMK k. 18ab: yañ prañiṣasamutpādaḥ śūnyatām tām pracakṣmahe / (sā prajñaptir upādāya pratipat saiva madhyamā //) ^{xiv} PPrT, PPr ins. // ^{xv} PPrT-PNG ins. / ^{xvi} PPrT-PNG om. la ^{xvii} PPr-DCPG ins. / ^{xviii} PPr ins. yod med dañ / ^{xix} PPr ins. / ^{xx} PPr ins. / ^{xxi} PPrT-PNG la ^{xxii} PPr-N ins. dañ ^{xxiii} PPrT-PNG ins. /: PPr ins. de / ^{xxiv} PPrT-NG źes ^{xxv} PPrT-G par ^{xxvi} PPrT-PNG om. / ^{xxvii} PPrT-PNG /

rigs med grogs ṅan dge sñon ma bstagsⁱ blo ma sbyaṅs //
 bsod nams ma yin phuṅ po cher 'phel yun riñ du //
 chos 'di la ni skrag 'gyur don chen 'di las ltuñ //ⁱⁱ

zés bśad pa lta bu'o //

2.12.2.1.2 Arising (D240b6–7, P287a7–8)

mig la soggs pa'i skye ba ni tha sñad kyi bden pa la brtenⁱⁱⁱ pa yin no^{iv} zés bya ba ni kun
 rdzob tu sgyu ma'i mtshan ñid tsam du skye ba'i tshul bstan te / de yañ skrag pa'i gnas ma yin
 no //

2.12.2.2 Emptiness [k. 18b] (D240b7–241a1, P287a8–b2)

de stoñ pa ñid du bśad pa^v ni^{vi} ño bo ñid dañ bral pa'i phyir te^{vii} zés bya bas ni /

rten ciñ 'brel 'byuñ gañ yin pa //

de ni stoñ pa ñid du bśad // k. 18ab [2nd time]^{viii}

ces bya bas rten ciñ 'brel bar 'byuñ ba bden pa gñis kyi tshul du rnam par gźag^{ix} pa^x gañ yin pa
de stoñ pa ñid du bśad pa ni rkyen gźan la brten te byuñ bas bden pa gñi ga'i tshul du yañ **ño bo**
ñid dañ bral ba'i phyir no bo ñid stoñ pa ñid yin no zés bya ba'i tha tshig go //

2.12.2.3 Textual evidence (D241a1–3, P287b2–4)

de ñid kyi khuṅs bstan pa'i phyir / 'phags pa *Klu'i rgyal po ma dros pas źus pa'i mdo las / ji*
 skad du /

gañ źig rkyen las^{xi} skye ba^{xii} de ma skyes //^{xiii}

de la ño bo ñid kyi skye ba med //^{xiv}

gañ źig rkyen la ltos^{xv} pa de stoñ gsuṅs^{xvi} //

gañ gis stoñ ñid śes de^{xvii} bag yod yin //^{xviii}

zés gsuṅs pa dañ / de bźin du 'phags pa *Lañ kar gśegs pa'i mdo las / blo gros chen po ño bo*
ñid kyi skye ba^{xix} med pa la dgoṅs nas^{xx} chos thams cad stoñ par bśad do zés gsuṅs pa lta
bu'o^{xxi} zés bya ba smras so //

ⁱ PPrṬ-PNG bsags ⁱⁱ PPrṬ, PPr om. // ⁱⁱⁱ PPrṬ-PNG rten ^{iv} PPrṬ-PNG, PPr-DCNG ins. //: PPr-P ins. /
^v PPrṬ-PNG pas ^{vi} PPr ins. / ^{vii} PPr ins. / ^{viii} MMK k. 18ab: yañ pratītyasamutpādaḥ śūnyatām tām pracakṣmahe /
 (sā prajñaptir upādāya pratipat saiva madhyamā //) ^{ix} PPrṬ-PNG bśad ^x PPrṬ-PNG ins. / ^{xi} PPr-G om. las ^{xii} PPr
 skyes pa ^{xiii} PPrṬ-C / ^{xiv} PPrṬ-C / ^{xv} PPrṬ-PNG, PPr-PNG bltos ^{xvi} PPr gsuṅs: PPrṬ gsum ^{xvii} PPrṬ-PNG
 te ^{xviii} PPrṬ-PNG om. // ^{xix} PPrṬ-PNG om. ba ^{xx} PPr ins. / ^{xxi} PPrṬ-PNG, PPr ins. //

2.12.3 Dependent Designation and the Middle Way [k. 18cd] (D241a3–4, P287b4–5)

rten ciñ 'brel 'byuñ gañ yin pa //
de ni stoñ pa ñid du bśad //ⁱ k. 18ab [3rd time]ⁱⁱ

ces bya ba de ñid kun rdzob tu ñe bar len pa dag la brtenⁱⁱⁱ nas gdags par bya ba dañ / de ñid kyi bden pa gñis gañ no bo ñid med pas dbu ma'i lam yin par bstan pa'i phyir /

de ni brten nas gdags pa ste //^{iv}
de ni^v dbu ma'i lam yin no // k. 18cd^{vi}

žes bya ba smras so //

2.12.3.1 Dependent Designation [k. 18c] (D241a4–5, P287b5–6)

brten nas gdags pa'i tshul bstan pa'i phyir / rten ciñ 'brel par 'byuñ ba žes bya ba^{vii}stoñ pa
ñid gañ yin pa de ni brten nas gdags pa ste^{viii} žes bya ba smras so //

2.12.3.1.1 Conventionally there is no intrinsic nature (from Avalokitavrata's point of view, D241a5–b3, P287b6–288a5)

brten nas gdags pa de yañ kun rdzob tu 'jig rten pa dañ / 'jig rten las 'das pa'i tha sñad 'dogs pas rañ rañ gi ñe bar len pa dag la brten nas gdags pa yin pas no bo ñid med par bstan pa'i phyir / **'jig rten pa dañ 'jig rten las 'das pa'i tha sñad 'dogs^{ix} pas^x ñe bar len pa dag la brten nas gdags pa yin no**^{xi} žes bya ba smras^{xii} te / dños po gañ dag brten nas gdags par bya ba mig dañ / myu gu dañ / bum pa dañ / snam bu dañ / so so'i skye bo dañ / ñan thos dañ / rañ sañs rgyas dañ / byañ chub sems dpa' dañ / de bžin gśegs pa la sogs pa de dag ni so so'i ñe bar len pa'i rgyu dañ rkyen mig ni mer mer po la sogs pa dag la brten nas gdags / myu gu ni sa bon la sogs pa^{xiii} / bum pa ni 'jim pa la sogs pa / snam bu ni rgyu spun la sogs pa / so so'i skye bo ni las dañ ñon moñs pa la sogs pa / ñan thos dañ^{xiv} rañ sañs rgyas ni tshogs kyi lam dañ^{xv} ñon moñs pa'i sgrib pa spoñ ba la sogs pa /^{xvi} byañ chub sems dpa' dañ^{xvii} de bžin gśegs pa ni sa dañ pha rol tu phyin pa dañ^{xviii} stobs dañ mi 'jigs pa dañ^{xix} ma 'dres pa la sogs pa dag la brten nas gdags pa yin pas 'jig rten pa'i mig dañ / myu gu dañ / bum pa dañ / snam bu dañ / so so'i skye bo la sogs pa dag kyañ no bo ñid med pas stoñ pa ñid^{xx} du bśad la / 'jig rten las 'das pa ñan thos dañ / rañ sañs rgyas dañ / byañ

ⁱ PPrT-PNG om. // ⁱⁱ MMK k. 18ab: yañ prañīyasamutpādaḥ śūnyatām tāṃ pracakṣmahe / (sā prajñaptir upādāya pratipat saiva madhyamā //) ⁱⁱⁱ PPrT-G rten ^{iv} PPrT-P, PPr-PNG / ^v PPr-G ñid ^{vi} MMK k. 18cd: (yañ prañīyasamutpādaḥ śūnyatām tāṃ pracakṣmahe /) sā prajñaptir upādāya pratipat saiva madhyamā // ^{vii} PPr ins. / ^{viii} PPr ins. / ^{ix} PPrT-PNG 'dogs, PPrT-DC, PPr 'dod ^x PPrT-N pañ ^{xi} PPr ins. // ^{xii} PPrT-P smra ^{xiii} PPrT-DC sogs pa: PPrT-PNG sogs dañ ^{xiv} PPrT-DC ins. / ^{xv} PPrT ins. / ^{xvi} PPrT om. / ^{xvii} PPrT ins. / ^{xviii} PPrT ins. / ^{xix} PPrT ins. / ^{xx} PPrT-DC med pas stoñ pa ñid, PPrT-PNG med pa ñid

chub sems dpa' dan / de b'zin g'segs pa la sogs pa bden pa gzigs pa rnams kyañ no bo ñid med pas stoñ pa ñid du b'sad do //

2.12.3.1.2 Ultimately there is no intrinsic nature (from Avalokitavrata's point of view, D241b3, P288a5–6)

don dam par ni de dag rkyen rnams las kyañ rnam pa thams cad du skye ba med pa'i phyir / no bo ñid med pas stoñ pa ñid du b'sad do //

2.12.3.2 The Middle Way [k. 18d] (D241b3–D242a2, P288a6–b5)

de ñid dbu ma'i lam yin pa'i tshul bstan pa'i phyir /ⁱ de ñid dbu ma'i lam yin te / dbu ma ni skye ba dan / skye ba med pa dan / yod pa dan /ⁱⁱ med pa'i mtha' gñis spañs pa'i phyir / 'di lta ste /ⁱⁱⁱ skyes pa yañ ma yin / ma skyes pa yañ ma yin /^{iv} yod pa yañ ma yin / med pa yañ ma yin / rtag pa yañ ma yin / mi^v rtag pa yañ ma yin / stoñ pa yañ ma yin / mi stoñ pa yañ ma yin pas / de'i phyir *Śes rab kyi pha rol tu phyin pa las* /^{vi} 'di skad du^{vii} / dbu ma'i lam bsgom pa ni mig dños po yod ces bya bar yoñs su mi rtog / mig dños po^{viii} med ces bya bar yoñs su mi rtog go /^{ix} zes bya ba la sogs pa gsuñs pa dan / 'phags pa *dKon mchog brtsegs pa'i mdo las* / 'Od sruñs yod ces bya ba 'di ni mtha' geig go // med ces bya ba 'di ni mtha' gñis so // mtha' de gñis kyi bar gañ^x yin pa de ni /^{xi} gzugs can ma yin pa /^{xii} bstan du med pa /^{xiii} thogs pa med pa / mi gnas pa / snañ ba ma yin pa / rnam par rig^{xiv} pa ma yin pa /^{xv} gnas med pa'o /^{xvi} zes gsuñs pa de dag grub po // lam ni thob pa'i thabs śes pa'i^{xvii} tha tshig go^{xviii} zes bya ba smras te / rten ciñ 'brel bar 'byuñ ba zes bya ba stoñ pa ñid gañ yin pa brten nas gdags par bya ba de ñid dbu ma'i lam ste / tha sñad du yañ /

gañ las brten te gañ 'byuñ ba //

de ni re žig de ñid min //

de las g'zan pa'añ ma yin phyir //

de phyir^{xix} chad min rtag ma yin //^{xx} MMK XVIII.10^{xxi}

zes bya ba'i tshul gyis dbu ma'i lam yin la / don dam par yañ /

g'zan las śes min ži ba dan //

spros pa rnams kyis ma spros pa //

rnam rtog med don tha dad min //

ⁱ PPrṭ-PNG om. / ⁱⁱ PPrṭ-PNG om. / ⁱⁱⁱ PPrṭ-PNG om. / ^{iv} PPrṭ-N om. / ^v PPr-G ma / ^{vi} PPr ins. / ^{vii} PPrṭ 'di skad du: PPr ji skad du / ^{viii} PPr om. mig dños po / ^{ix} PPr-PN ins. / ^x PPrṭ-G om. gañ / ^{xi} PPr-PNG ins. / ^{xii} PPr-DC om. / ^{xiii} PPrṭ-PNG om. bstan du med pa / ^{xiv} PPr-G rigs / ^{xv} PPrṭ om. / ^{xvi} PPr-P ins. / PPr-NG ins. // ^{xvii} PPrṭ śes pa'i: PPr zes bya ba'i / ^{xviii} PPr ins. // ^{xix} PPrṭ-PNG phyin / ^{xx} G / ^{xxi} MMK XVIII k. 10: pratītya yad yad bhavati na hi tāvat tad eva tat / na cānyad api tat tasmān nocchinnaṃ nāpi śāśvatam //.

de ni de ñid mtshan ñid do // MMK XVIII.9ⁱ

žes bya ba'i tshul gyis dbu ma'i lam yin no //

2.12.4 Digression

2.12.4.1 Opponent's interpretation of k. 18 (D242a2–5, P288b5–8)

jiⁱⁱ ste 'di sñam du kho bo yañ smras teⁱⁱⁱ / rgyu dañ rkyen so sor ñes pa'i dbaṅ gis /^{iv}

rten ciñ 'brel 'byuñ gañ yin pa //

de ni stoñ pa ñid du bśad //

de ni brten^v nas gdags pa ste //^{vi}

de ñid dbu ma'i lam yin no // k. 18^{vii}

žes bya ba ni^{viii} dños po bdag ñid gañ gis sñon ma byuñ ba las 'byuñ ba de ni^{ix} dños po'i ño bo ñid yin la / de ri boñ gi rwa bźin du yod pa yañ ma yin / med pa yañ ma yin pa^x /^{xi} rañ gi bdag ñid kyis skye ba gañ yin pa de ni^{xii} mtha' gñis spañs pas^{xiii} dbu ma'i lam yin no^{xiv} sñam na^{xv} žes bya ba ni pha rol po dag slob dpon gyis mdzad pa'i tshig le'ur byas pa 'di'i don dños po ño bo ñid med pa ñid ma yin gyi sñon ma byuñ ba las 'byuñ žin mtha' gñis su brjod par mi bya bas stoñ pa ñid kyañ yin la / rañ gi bdag ñid kyis skye ba yañ yod pas / ño bo ñid yod pa de dbu ma'i lam yin no sñam du sems pa'i bsam pa yin no //

2.12.4.2 Response to opponent (D242a5–b1, P288b8–289a5)

de dgag pa'i phyir 'dir 'grel pa byed pa ñid kyis / de la 'di ltar^{xvi} stoñ pa ñid 'grub par mi 'gyur te / tshigs su bcad pa 'di ni rnam par rtog pa'i dri ma 'khru bar byed pa yin na / gal te khyod^{xvii} rnam par rtog pa'i dri^{xviii} ma'i 'dam rdzab kyis sbags^{xix} pa'i phyir^{xx} sbyor bar byed na sbyor ba la rag las te^{xxi} / 'di ltar gtsug gi nor bu rkañ pa'i rgyan du 'dogs par byed na mi^{xxii} 'khañ^{xxiii} mod kyi / 'on kyañ 'dogs par byed pa^{xxiv} de^{xxv} gnas ma yin par 'dogs par byed do žes mkhas pa rnam kyis khrel bar 'gyur ba de bźin du^{xxvi} khyod^{xxvii} de skad smra bas kyañ tshigs su bcad pa 'di la ni gnod pa med mod kyit^{xxviii} xxix, 'on kyañ khyod kyit^{xxx} 'dod pa'i don 'grub par mi 'gyur te / rten ciñ 'brel bar 'byuñ ba ni^{xxxii} ño bo ñid^{xxxiii} yod pa ñid med na mi 'byuñ ba yin par mi 'grub pa'i phyir ro^{xxxii} žes bya ba smras te / rten ciñ 'brel

ⁱ MMK XVIII k. 9: aparapratyayaṃ śāntaṃ prapañcair aprapañcitam / nirvikalpam anānārtham etat tattvasya lakṣaṇam //

ⁱⁱ PPrT ji: PPr ci ⁱⁱⁱ PPrT-PNG, PPr smra ste ^{iv} PPrT-CPNG, PPr /: PPrT-D // ^v PPr-PNG rten ^{vi} PPr-P / ^{vii} MMK k. 18: yaḥ pratīyasamutpādaḥ śūnyatāṃ tāṃ pracakṣmahe / sā prajñaptir upādāya pratipat saiva madhyamā //

^{viii} PPr-DCN ins. / ^{ix} PPr ins. / ^x PPr-DC om. pa ^{xi} PPrT-PNG om. / ^{xii} PPr-DC ins. / ^{xiii} PPrT pas: PPr pa'i ^{xiv} PPrT-PNG ins. // ^{xv} PPr ins. / ^{xvi} PPrT-DC 'di ltar: PPrT-PNG, PPr 'dir ^{xvii} PPrT-PNG khyed ^{xviii} PPr-D di ^{xix} PPrT-PNG sbag ^{xx} PPr ins. / ^{xxi} PPrT sbyor ba la rag las te: PPr sbyor la rag ste ^{xxii} PPrT, PPr-CPNG mi: PPr-D ni ^{xxiii} PPrT-PNG mi 'thad ^{xxiv} PPrT pa: PPr na ^{xxv} PPr ins. / ^{xxvi} PPr ins. / ^{xxvii} PPr-PNG khyed ^{xxviii} PPr-PNG kyis ^{xxix} PPr ins. / ^{xxx} PPr ins. / ^{xxxii} PPr om. ñid ^{xxxiii} PPrT-PNG, PPr ins. //

bar 'byuñ ba ni ño bo ñid yod pa dañ 'brel par mi 'grub pa'i phyir slob dpon gyi źal sña nas kyisⁱ
mdzad pa'i tshigⁱⁱ le'ur byas pa 'di'i don log par ma 'dren cig ces bstanⁱⁱⁱ to //

2.13 Emptiness and Dependent Arising are inseparable [k. 19] (D242b1–3, P289a5–7)

de ñid bstan pa'i phyir bśad pa^{iv} /

gañ phyir rten 'byuñ ma yin pa'i //^v

chos 'ga' yod pa ma yin pa^{vi} //^{vii}

de phyir stoñ pa ma yin pa'i //^{viii}

chos 'ga' yod pa ma yin no //^{ix} 19 [1st time]^x

rten ciñ 'brel bar 'byuñ ba ni sgyu ma'i skyes bu bźin du ño bo ñid med pa'i phyir ro źes
bya bar dgoñs so^{xi} źes bya ba^{xii} smras te / nañ dañ phyi rol dañ / 'jig rten pa dañ 'jig rten las 'das
pa'i chos thams cad ni ño bo ñid med de / rten ciñ 'brel bar 'byuñ ba'i phyir dper na sgyu ma'i
skyes bu bźin no źes bya bar dgoñs so //

2.13.1 Objection (concerning the concept of ākāśa, D242b3–6, P289a7–b3)

gal te nam mkha' la sogs pa^{xiii} rten ciñ 'brel bar 'byuñ ba ma yin pa dag la rten ciñ 'brel
bar 'byuñ ba^{xiv} med pa'i phyir^{xv} gtan tshigs mthun^{xvi} pa'i phyogs kyi^{xvii} phyogs gcig^{xviii} la
ma grub pa ñid kyi skyon yod do źe na^{xix} źes bya ba ni pha rol po^{xx} dag na re dbu ma pas /

gañ phyir rten 'byuñ ma yin pa'i //

chos 'ga' yod pa ma yin pa^{xxi} //

de phyir stoñ pa ma yin pa'i //

chos 'ga' yod pa ma yin no // 19 [2nd time]

źes bya bas rten ciñ 'brel bar 'byuñ ba ni sgyu ma'i skyes bu bźin du ño bo ñid med pa'i phyir
ro źes bśad pa'i gtan tshigs rten ciñ 'brel par 'byuñ ba źes bya ba des^{xxii} ma khyab pa yin te /
'di na nam mkha' la sogs pa rten ciñ 'brel bar 'byuñ ba ma yin pa dag la rten^{xxiii} ciñ 'brel
par 'byuñ ba med pa'i phyir khyod^{xxiv} kyi gtan tshigs rten ciñ 'brel bar 'byuñ ba źes bya ba de

ⁱ PPrT-P gyis ⁱⁱ PPrT-N tshigs ⁱⁱⁱ PPrT-PNG ston ^{iv} PPrT de ñid bstan pa'i phyir bśad pa: PPr de'i phyir
bśad pa ^v PPr-P / ^{vi} PPrT, PPr PNG pa: PPr-DC la ^{vii} PPr-P / ^{viii} PPr-P / ^{ix} PPr-C / ^x MMK k. 19:
apratītyasamutpanno dharmah kaścin na vidyate / yasmāt tasmāt aśūnyo 'pi dharmah kaścin na vidyate // ^{xi} PPr-D
ins. /, PPr ins. // ^{xii} PPrT-C bar ^{xiii} PPr-DC ins. //: PPr-PNG ins. /: PPrT ins. la ^{xiv} PPrT-PNG om. ma yin pa dag
la rten ciñ 'brel bar 'byuñ ba ^{xv} PPr-DCNG ins. /: PPr-P ins. ro // ^{xvi} PPrT-DC 'thun ^{xvii} PPrT-PNG om. phyogs
kyi ^{xviii} PPrT-PNG cig ^{xix} PPr ins. / ^{xx} PPrT-C pha rol pa ^{xxi} CPNG // ^{xxii} PPrT-DC de ^{xxiii} PPrT-P brten
^{xxiv} PPrT-PNG khyed

gzugs la sogs pa'i **mithun pa'i phyogs** ⁱnam mkha' la sogs pa'i **phyogs gcig la** ⁱⁱ **ma grub pa ñid kyi skyon yod** pas mi ruñ ño źes zer ba'i tshig yin no //

2.13.2 Response (D242b6–7, P289b3–5)

de'i lan du 'dir 'grel pa byed pa ñid kyis / **de ni lan btab zin pa'i phyir klan kar mi ruñ ño** ⁱⁱⁱ źes bya ba smras te / mithun pa'i phyogs la ma khyab kyañ gtan tshigs su ruñ ba dper na sgra ni mi rtag ste / brtsal ^{iv} ma thag tu 'byuñ ba'i phyir ro źes bya ba de ^v / glog dañ nags kyi me tog dag ^{vi} la ma khyab kyañ sgra mi rtag pa'i gtan tshigs su ruñ bas skyon med do źes **lan btab zin pa'i phyir klan kar mi ruñ ño** //

2.14 Conclusion of criticism of *Pūrvapakṣa* (D242b7–243a2, P289b5–7)

de'i phyir don dam par ^{vii} **dños po rnam s no bo ñid yod pa kho na yin te / 'byuñ ba dañ** ^{viii} **'jig pa'i chos can yin pa'i phyir ro** ^{ix} **źes gañ smras pa'i gtan tshigs de'i rjes su 'gro ba yañ** ^x **med la** ^{xi} **mi mithun pa'i** ^{xii} **phyogs 'ba' źig la mthoñ ba'i** ^{xiii} **phyir don 'gal ba ñid kyañ yin no** ^{xiv} **źes bya ba ni mjug bsdu ba dañ tshad ma'i 'bras bu yin te / pha rol pos smras pa'i gtan tshigs de la don dam par dpe med pas** ^{xv} **ma grub pa ñid yin la / kun rdzob tu don dam pa'i mi mithun pa'i phyogs 'ba' źig la mthoñ ba'i phyir don 'gal ba ñid kyañ yin pas dños po rnam s no bo ñid yod pa ñid du ma** ^{xvi} **grub po** //

Notes

¹ 那須 [2000b, 10.21] は対論者を「アビダルマ論者」としているが、その対論者の主張内容を鑑みて、対論者をアビダルマ論者に限定する必要はないと思われる。なお、漢訳に具体的な対論者名は挙がっていない。

² PPr ad MMK XXIV.7 (赤羽ほか [2013, chap. 2.1.2.3]) では *sūnyatārtha* はすなわち *tathatā* であるが、ここではその解釈を読み込まない。ここでは単に対論者が概念化した対象を意味しており、*tathatā* を想定する必要はない。

³ 既出の XXIV.14cd 「空性が成り立たない〔とする〕者には、すべてが成り立たない」を意図してい

ⁱ PPrT-PNG ins. cig ⁱⁱ PPrT-DC la sogs pa'i phyogs gcig la: PPrT-PNG la sogs cig ⁱⁱⁱ PPr ins. // ^{iv} PPrT-PNG brtsal ^v PPrT-PNG źes bya bas te ^{vi} PPrT-PNG om. dag ^{vii} PPr-C pas ^{viii} PPr-DC ins. / ^{ix} PPr-PNG ins. // ^x PPrT-PNG, PPr-PNG om. yañ ^{xi} PPr ins. / ^{xii} PPrT-PNG om. pa'i ^{xiii} PPrT mthoñ ba'i: PPr mñon pa'i ^{xiv} PPr ins. // ^{xv} PPrT-PNG pa ^{xvi} PPrT-PNG om. ma

る。See 赤羽ほか [2018, chap. 2.8.4].

⁴ 「de'i don」を直前の Avalokitavrata の説明「stoṅ pa ṅid de'i don」にしたがって「空性という対象」と理解した。

⁵ 「有・無・両者」「別異・非別異・両者」というように考えて訳した。漢訳（大正 30. 126a28–b1）はさらに項目を追加しながら、細分化を進めている：非有・非無・非亦有亦無・非非有非非無・非異非一・非自非他・亦非俱非不俱。

⁶ raṅ gi dños po に関して、漢訳中に対応する語は見当たらない。

⁷ この偈頌は *Mahāyānasūtrālamkāra* 第 I 章第 14 偈に相当する（Lévi ed. [1907, 6.3–6], 能仁 [2009, 66.4–7]）：

tadasthānatrāso bhavati jagatām dāhakaṛaṇo
mahāpuṇyaskandhaprasavakaraṇād dīrghasamayaṃ /
agotro 'sanmitro 'kṛtamatir apūrvocitaśubhas
trasaty asmin dharme patati mahato 'rthāt tata iha //

ただし、*Mahāyānasūtrālamkāra* 梵文では b 句が「焼き悩まされる (dāhakaṛaṇa)」の理由句となっており、そのチベット語訳もそれを支持するが、PPrT はこれを cd 句で列挙される項目の一部として理解しているようである。相違はあるものの、本稿では PPrT に従って訳出した。興味深いことに PPrT の引用する本偈は、lCe bkra shis (ca. 12–13c) の訳出による Sthiramati (ca. 510–570) の注釈、*Sūtrālamkāravṛttibhāṣya* 中の本偈と類似している（D mi 24b4–25a3, P mi 26a5–b4）：

'gro ba gñas ma yin la skrag pa gduṅ byed pa // 'zes bya ba la /... bsod nams ma yin phuṅ po cher
'phel ba // 'zes smos te /... dus ji srid cig tu ṅan soṅ du gñas sñam pa la yun riṅ du 'zes smos te /... rigs
med grogs ṅan dge sñon ma bsags blo ma sbyaṅs // 'zes smos te /

この類似が如何なる理由によるかは不明であるが、PPrT と *Sūtrālamkāravṛttibhāṣya* との訳出の過程を考える上での好材料と言えよう。

⁸ この引用経典は、江島 [1992, 89 n. 14] や古坂 [1983] 等によって指摘されているように、『弘道広顯三昧經』（大正 15. 497b3–4：縁生彼無生是不与自然善縁斯亦空空彼無欲）、'phags pa Klu'i rgyal po ma dros pas śus pa śes bye ba theg pa chen po'i mdo と対応する。また、PPr 第 I・VII・XXIV 章、『大乘掌珍論』（大正 30. 269a11–12）、*Tarkajvālā* 第 V 章、*Prasannapadā* 第 XIII・XXIV 章、*Subhāṣitasamgraha*, *Madhyamakāloka*, *Bodhisattvacaryāvatāra-pañjikā*, ツオンカパの『菩提道次第大論』（*Byang chub lam rim chen mo*）等にも引用される。引用内容については諸論書において多少の相違が見られるが、参考にサンスクリットの残る *Prasannapadā* 第 XXIV 章（LVP ed. [1903–13, 504.1–4, cf. 239 n. 2]; 岸根 ed. [2002, (6).8–11]）より当該箇所を紹介しておく：

yaḥ pratyayair jāyati sa hy ajāto na tasya utpādu svabhāvato 'sti /
yaḥ pratyayādhīnu sa sūnyu ukto yaḥ sūnyatām jānati so 'pramattaḥ //

⁹ この経典の引用について、PPrT および漢訳 PPr（大正 30. 126b6–7：如楞伽經說，自体無起，体無起者，如仏告大慧，我説一切法空）は『楞伽經』からの引用とする。同偈に対する *Prasannapadā* (PrasP)

の注釈でも同じ偈頌が引用され、同じく『楞伽經』の文言とされている (PrasP XXIV ad k. 17 [LVP ed. 504.5–6]) :

tathāryaLankāvatārasūtre / svabhāvānutpattim saṃdhāya mahāmate sarvadharmāḥ śūnyā iti mayā deśitā iti

ただし、諸研究 (丹治 [2006, 171, n. 237, 238], ツルティム・藤仲 [2017, 364, n. 3-88] 等) によって指摘されているように、現在確認されている『楞伽經』には対応する箇所が見出されない。『楞伽經』の次の一節 (Nanjio ed. [1923, 76.2–5]),

na svayam utpadyate, na ca punar mahāmate te notpadyante 'nyatra samādhyaavasthāyām / tenocyante 'nutpannā niḥsvabhāvāḥ / anutpattim saṃdhāya mahāmate niḥsvabhāvāḥ sarvabhāvāḥ

との類似性が指摘されているが⁹、正確な対応箇所は不明である。さらに、この偈頌と類似するものが PrasP XV ad k. 2ab (LVP ed. 262.6–7) にも引用されている。

tathā svabhāvānutpattim saṃdhāya mahāmate mayā sarvadharmā anutpannā ity uktā iti vistaraḥ //

ここでは、後半の「すべての法は空である」が「すべての法は不生である」となっている。この直前にも『楞伽經』が引用されているため、「同様に (tathā)」は、この偈頌もまた『楞伽經』からの引用であることを示すものと考えられる。「すべての法は不生である」と説く同偈は『アナヴァタプタ龍王所問經』と同様に『菩提道次第大論』にも引用されるが、注目すべきはツォンカパの次の文言である (Khangkar [2014, 411.20–412.1], ツルティム・藤仲 [2017, 61.13]) :

Tshig gsal du draṅs pa'i Lan gzeḡs las kyaṅ / (『プラサンナパダー』に引用された『楞伽經』にも)

ツォンカパは同偈を『楞伽經』からの直接の引用ではなく、『『プラサンナパダー』に引用された『楞伽經』』としている。ツォンカパの知っている『楞伽經』に当該箇所がそのまま見出せなかったのではないだろうか。ひいては、この引用が『楞伽經』の文言ではない可能性も考えられるが判然としない。何れにしても以上指摘したように、詳細は不明であるが、前注で示した『アナヴァタプタ龍王所問經』と併せて伝統的に引用される偈頌のようである。

¹⁰ k. 18cd の詳細については、吉水 [1997] などの先行研究においても様々に議論がなされている。

¹¹ Uryuzu [1971, 23], 那須 [2000b, 12–13] はこの箇所を 'dod pas と考えてそれぞれ「approved by the mundane and super-mundane convention」「世間的な〔言語活動〕と出世間的な言語活動を認めるので」と訳しているが、直前の PPrT の表現と内容に鑑みて、本稿では 'dogs pas というヴァリエントを採用した。

¹² この「諦をご覧になる方々 (bden pa gzigs pa rnams)」という表現は、単数形として MHK 第 V 章 第 110 偈にも見られる :

satyadvayam ataś coktaṃ muninā tattvadarśinā /
vyavahāraṃ samāśritya tattvārthādhigamo yataḥ // MHK 5.110 (Eckel ed. 2008)

thub pa bden pa gzigs pa yi // 'di ltar bden pa gñis su gzuṅs //
tha sñad la ni brten nas su // de ñid don ni rtogs 'gyur phyir // MHK 5.110 (Eckel ed. 2008)

¹³ 本稿の chap. 2.12.2.1.1 を参照して補った。

¹⁴ この『般若波羅蜜』の出典は不明であるが、『十万頌般若經』には次のような文が見られる (Ghoṣa ed. [1902–1913, 181–182]):

bodhisattvo mahāsattvaḥ prajñāpāramitāyāṃ caran... na cakṣur bhāva iti yojayati na cakṣur abhāva
iti yojayati /

¹⁵ *Prasannapadā* (LVP ed. 270) に同様の引用が見られる：

tathā / astīti kāśyapa ayam eko 'nto nāstīti kāśyapa ayam eko 'ntaḥ / yad enayor dvayor antayor
madhyaṃ tad arūpyam anidarśanam apratiṣṭham anābhāsam aniketam avijñaptikam iyam ucyate
kāśyapa madhyamā pratipad dharmāṇāṃ bhūtapratyavekṣeti //

Kāśyapaparivarta に全く同じ文を見出すことはできないが、類似する以下の箇所を提示しておく (von Staël-Holstein ed. 1926)：

Section 56: nityam iti kāśyapa ayam eko 'ntaḥ anityam iti kāśyapa ayam dviṭīyo 'ntaḥ yad etayor
dvayo nityānityayor madhyaṃ tad arūpy anidarśanam anābhāsam avijñaptikam apratiṣṭham aniketam
iyam ucyate kāśyapa madhyamā pratipad dharmāṇāṃ bhūtapratyavekṣā /

Section 57: ātmeti kāśyapa ayam eko 'ntaḥ nairātmyam ity ayam dviṭīyo 'ntaḥ yad ātmanairātmyayor
madhyaṃ tad arūpy anidarśanam anābhāsam avijñaptikam apratiṣṭham aniketam iyam ucyate
kāśyapa madhyamā pratipad dharmāṇāṃ bhūtapratyavekṣā /

Section 60: astīti kāśyapa ayam eko 'ntaḥ nāstīty ayam dviṭīyo 'ntaḥ yad etayor dvayor antayor
madhyam iyam ucyate kāśyapa madhyamā pratipad dharmāṇāṃ bhūtapratyavekṣāt

¹⁶ PPrT に基づいて「道は獲得の方便である知の意味である」と訳したが、PPrT に「知 (śes pa'i)」とあるのに対して、PPr では「という (zes bya ba'i)」となっており、こちらに基づけば「道は獲得の方便という意味である」となる。漢訳 (大正 30. 126b16–17：如是中道名為得証実相方便) にも「知」にあたる語は見出せない。ところで、この*pratipat と*prāpti の語は、Bhāviveka の勝義解釈 (赤羽ほか [2013, chap. 2.2.3]) に影響を与える『中辺分別論』第 III 章第 10 偈を想起させるものである。そこでは勝義が artha, prāpti, prāpatti (pratipatti) として説かれている。注釈では、prāpatti (pratipatti) としての勝義である道 (mārga) が涅槃 (prāpti としての勝義) を目的とすることが説かれており、この箇所との関連性を示唆する内容となっている。

¹⁷ Uryuzu [1971, 55 n. 66] が指摘するように、以下の対論者の問いとそれに対する応答に相当する箇所は、漢訳に存在しない。

¹⁸ やや内容が理解しにくいチベット文であるが、この後に Avalokitavratā が文意を明確にしている。なお、前注にも断つたとおり、漢訳はこの対論を欠く。

¹⁹ この対論者の主張のうち、証因と同品の内容について、Avalokitavratā の示す論証式にしたがえば、証因は「縁起したものであるから」、同品は「無自性であるもの」となるが、この対論者の主張は PPr の一文であり、PPr の文脈からその内容を検討する必要がある。ただし、Bhāviveka は k. 19 を「『縁起は

幻化人のように無自性だからである』ということを用意している」と説明しており、その場合に想定される反論であるので、PPrでも証因は「縁起」、同品は「無自性なもの」であり、Avalokītavratāの注釈はBhāvivekaの意図に適っていると見える。

²⁰ 対論者は証因に対して、虚空を例に挙げ反論している。同様の反論はPPr第XV章 ad kk. 1–2にも見られ、それゆえにこの後、Bhāvivekaは「それにはすでに回答を与えている」と一蹴する。なお、Uryuzu [1971, 40.25]はこの対論者をSāṃkhyaと見なす。理由は漢訳（大正30. 126b21–23）と思われる：僧佉人言，如虚空等不從縁生。從縁生法為出因者，於彼宗中一分之義此義不成。是彼出因之過。

²¹ 前注を参照されたい。

²² 相当箇所は、同第XXIV章のpūrvapakṣaの最後に提示される論証式である。See 赤羽ほか [2011, chap. 1.3.2].

参考文献

(本稿で初めて参照したものに限る)

Eckel, M. David

2008 *Bhāviveka and his Buddhist Opponents*, Harvard University Press.

Ghoṣa, Pratāpacandra

1902–1913 *Śatasāhasrikā Prajñāpāramitā*, Calcutta.

Khangkar, Tsultrim Kelsang

2014 *Rje Tsong kha pa'i Lam rim chen mo'i lung khungs gsal byed nyi ma glegs bam gnyis pa*,
Khang dkar Tshul khriṃs sKal bzang mchog gi gsung 'bum, 7.

Lévi, Sylvain

1907 *Mahāyāna-Sūtrālamkāra*, Paris.

Louis de la Vallée Poussin (LVP)

1903–13 *Mūlamadhyamakakārikās (Mādhyamikasūtra) de Nāgārjuna avec la Prasannapadā
Commentaire de Candrakīrti*, Bibliotheca Buddhica IV, St. Pétersbourg.

Nanjio, Bunyiu

1923 *Lankāvatāra Sūtra*, Kyoto.

von Staël-Holstein, A.

1926 *The Kāśyapaparivarta*, 商務印書館.

赤羽律・早島慧・西山亮

2011 「*Prajñāpradīpa-ṭīkā* 第XXIV章テキストと和訳(1) : anusaṃdhi & pūrvapakṣa」『インド学チベット学研究』インド哲学研究会, 第15号, pp. 165–195.

2013 「*Prajñāpradīpa-ṭīkā* 第XXIV章テキストと和訳(2) : uttarapakṣa 1」『インド学チベッ

- ト学研究』インド哲学研究会, 第 17 号, pp. 63–86.
- 2018 「Prajñāpradīpa-ṭīkā 第 XXIV 章テキストと和訳 (3) : uttarapakṣa 2」『インド学チベット学研究』インド哲学研究会, 第 22 号, pp. 58–79.
- 江島恵教
- 1992 「Bhāviveka の言語観 : 瑜伽行学説批判との関連において」『成田山仏教研究所紀要』15, pp. 75–93.
- 岸根敏幸
- 2002 「『プラサンナパダー』第 24 章「聖なる真理の考究」校訂テキスト (3)」『福岡大学人文論叢』132, (1)–(36).
- ツルティム・ケサン, 藤仲孝司
- 2017 「ツォンカバ菩提道次第大論の研究 III」UNIO.
- 能仁正顕 編
- 2009 「『大乘莊嚴經論』第 I 章の和訳と注解 : 大乘の確立』自照社出版.
- 古坂紘一
- 1983 「空性理解の規範性について」『印度学仏教学研究』32 (1), pp. (99)–(102).
- 吉水千鶴子
- 1997 「Upādāyaprajñapti について : Mūlamadhyamakakārikā XXIV 18 を考える」『成田山仏教研究所紀要』20, pp. 95–155.

*本研究は JSPS 科研費 JP20J01816 の助成を受けたものである。

The XXIVth chapter of the *Prajñāpradīpa-ṭīkā* Tibetan Text and Japanese Translation (4)

– uttarapakṣa 3 –

Summary

This paper is the fourth part of our critical edition of the Tibetan text and Japanese translation of chapter XXIV of Avalokitavratā's *Prajñāpradīpa-ṭīkā*. Verse 18, one of the most influential verses in the history of Buddhist philosophy, includes four fundamental concepts: *pratītyasamutpāda*, *śūnyatā*, *prajñaptir upādāya*, and *madhyamā pratīpat*. Most scholars of Madhyamaka have focused on Candrakīrti's brief commentary on the verse in his *Prasannapadā*, while the more expansive and illuminating commentaries by Bhāviveka and Avalokitavratā have been largely neglected. They use their commentaries on this verse to develop a detailed analysis of the distinction between

two truths, in a way that Candrakīrti does not. This paper provides a translation of Bhāviveka's and Avalokitavrata's interpretation of this important verse.

<キーワード> *Prajñāpradīpa-ṭīkā*, Avalokitavrata, 観誓, Bhāviveka, 清弁, uttarapakṣa, 中論, 観四諦品, MMK24.18, 三諦偈